慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ベルクソンにおける「人類」の位置づけ
Sub Title	La position de l'humanité chez Bergson
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2022
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.15, (2022.) ,p.71- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20220000-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンにおける「人類」の位置づけ

西 山 晃 生

はじめに

『道徳と宗教の二源泉』（1932、以下『二源泉』と略記）において、ベルクソンは「私たちは異論の余地なく incontestablement 人間としての人間に対する義務 devoirs envers l'homme en tant qu'homme を負っている」（DS 25）と述べる。同書の中でさほど目立つとは言い難い箇所ではあるが、かなり強い調子を帯びていることは間違いない。そして、この「人間としての人間に対する義務」は、すぐ後で「人類に対する義務 devoirs envers l'humanité」（DS 26）と言い換えられる。ベルクソンはおそらくここで「正義」「友愛」「隣人愛」のような普遍的価値を念頭に置いている。彼にとっては、これらの価値はぜひ擁護し、実際に行動に役立てることができなければならないものである。その際、重要になるのが「人類」に他ならない。本稿の目的は、『二源泉』、とりわけ第 1 章の議論をたどり、ベルクソンが「人類」という語を用いて何をしようとしたのか明らかにすることである。

彼が「閉じた社会」と「開かれた社会」を区別したことは知られていよう。「人類」は、このうち「開かれた社会」とほぼ等しい[1]。一方、「閉

＊『道徳と宗教の二源泉』からの引用は、略号（DS）の後に、以下の Quadrige 版の頁数を付した。
Les Deux Sources de la morale et de la religion, 1932.

1 「人類全体であるような開かれた社会…」（DS 25）

じた社会」は、私たちが通常暮らしている社会であり「人類」とは本質的に異なるにもかかわらず、多くの人は「閉じた社会」の延長線上に「人類」があると考えてしまう[2]。本稿では、ベルクソンが「閉じた社会」のものとみなすそうした特徴についても触れてみたい。

議論は以下のように進む。第１節、第２節では「閉じた社会」について、第３節では「開かれた社会」あるいは「人類」について検討する。また、ベルクソンが目的を達するために取る意外な手段について、結論部分で論ずる。

第１節　必然性としての責務

「社会とは自然によって与えられるものか、それとも人為的な仕方で形成されるものか」という粗雑な問いから始めよう。この問いに対して、ベルクソンは「社会は自然を模倣するものである」と答えるはずだ。社会は自然とは異なるが、自然と同じようなものとして現れるし、そのような形で現れざるを得ない、というのが彼の見方である。「すべてが…社会秩序を、諸事物のうちに観察される秩序の模倣たらしめようと力を合わせる」（DS 6、強調は引用者）ことになる。『二源泉』第一章の、とりわけ冒頭箇所は、この社会による自然の模倣を論ずることに費やされる。

ただ、『二源泉』における模倣といえば、多くの人が想起するのは「開かれた道徳」に関係する議論、すなわち「道徳的偉人」と呼ばれる人物を範とし、これを「ともに模倣すること」（DS 31）が取り上げられる局面であろう。しかし、本稿で論じる「人類」の理解に関しては、いずれの模倣も劣らぬ重要さを示すと考えられる。後者の模倣に関しては第３節で扱うことにして、本節では社会による自然の模倣を検討してみよう。

2　もっとも、「閉じた社会」がそれとして現れるのは、「開かれた社会」との対比によってでしかない。この点に関しては Worms (2008), p.53 を参照。

『二源泉』の冒頭でベルクソンが強調するのは、私たちが親や教師に服従する習慣を身につけてしまっているという事態である（DS 1）。これらの習慣は責務となり、私たちの行動に圧力を加える。もちろん、親や教師の権威は絶対的なものではなく、私たちは時として彼らに従わないこともできる。したがって、個々の責務は逃れうるものである。しかし、周囲からの要求に応じてふるまうことが人間にとって本質的である以上、「責務一般」（DS 3）、「責務の全体」（DS 13）を拒むことは誰にもできない。社会は諸個人に責務が課されることによって存続し、秩序づけられる（DS 3）。

私たちを取り巻くものから発せられる要求は、さらにそれを取り巻くものから要求されるのであり、元をたどっていくと要求の「最終的な限界」（DS 3）へと達する。それは「何か巨大なもの、あるいは無際限なもの」（DS 1）である。これこそが社会に他ならない。つまり、社会は責務を課すものであり、責務に支えられるものでもある。こうした社会のあり方を示すため、多くの論者がしたように、ベルクソンもまた、有機体の比喩に訴える。

> それ〔社会〕について哲学するにあたって、私たちはそれを有機体に喩えるだろう。その諸細胞は不可視の紐帯によって結合され、巧みな位階のうちで相互に従属し、全体の利益を最大化するために部分の犠牲を要求するような規律にごく自然に従っている。たしかにこれは比喩でしかないだろう。というのも、必然的法則に従う有機体と自由な意志によって構成される社会は別のものだからだ。しかし、これらの意志は有機化されるものである以上、有機体を模倣する。（DS 2、強調は引用者）

全体を構成する諸部分が緊密な仕方で関係し、ときには部分が全体を存続させるために犠牲になるようなあり方は、この比喩が明示的に示すことであり、そして、これが「比喩でしかない」ことをも同時に示す。「自

由な意志」をもつ人間は、全体のために犠牲になってくれるとは限らないからである。しかし、ベルクソンが有機体を引き合いに出すとき、もう一つ別の含意がある。

> 実のところ、私たちは数多の部分的な諸責務が加算されて責務の全体を合成するような事態を明確に考えているのではない。おそらく、ここでは諸部分の合成というものすら真の意味では存在しない。ある責務が他のすべての責務から引き出す力はむしろ、有機体の細胞それぞれがそれらを一要素とする有機体の奥底から吸い込む不可分で完全な生命の息吹に喩えられる。（DS 3）

個々の責務が、免れうるものであるにもかかわらず命令という性格を帯びるのは、「責務の全体が各々に内在しているから」（DS 13）である。「不可分で完全な生命の息吹」によって個々の細胞が活気づけられるのと同様、社会の秩序―諸習慣が支え合い、規律をなす体系―もまた、部分が全体から力を得るという構造を示す。そして、「生命現象の曲げられない秩序」（DS 3）と同様、社会秩序もまた「不可避なもの」（DS 5）として理解される。「個人に対する社会の圧力」（DS 46）が成立するのは、社会秩序があたかも物理的な諸事物を支配する法則のように自然で、それゆえ避けることのできないものとして現れるからに他ならない。「責務の全体」とはこの必然性のことを指す（DS 54）。

ベルクソンが再三強調するように、これは比喩に過ぎない。冷静に考えれば、「事実確認する法則と命令する法則（DS 4）とは根本的に異なるものに見えるはずだ。しかし、「大部分の人たち」（DS 4）にとってはそうではないという。

> 物理法則だろうと、社会法則あるいは道徳法則だろうと、彼らの眼にはすべての法則は命令と映る。…物理法則がある一般性に達すると、

> 私たちの想像力にとって命令という形式を纏う傾向があるのに対して、すべての人 tout le monde に差し向けられる命令は多少なりとも自然法則のようなものとしてとして私たちに現れる。（DS 5）

思考を働かせれば決して同じには見えないものが、実践的には同様に機能してしまう。「一種の交換」（DS 5）が生じ、物理法則は命令、責務は必然性という性格を帯びるようになる。もともと異なる仕方で現れるものが、不注意や知識の欠如によって混同されてしまうからではない。必然的な物理法則と命令を与える責務とは「何世紀もの文明化の間に」（DS 25）蓄積された知識や思考習慣によってはじめて区別されるものである。そして、そうした区別を経た後でも「責務の全体」を自然的なものととらえる態度は「生き生きと」（DS 25）した状態で残っている。「社会が自然を模倣する」とは以上のような事態を指す。社会（を支える責務）は自然の必然性をこそ模倣するのである[3]。

本節で責務のこの必然性に触れたのは、ベルクソンが「人類」に言及する仕方を解き明かすことに立つに役立つと考えられるからだ。その見通しを簡単に述べておこう。社会秩序が自然の秩序と同じように映るとき、これに対する批判は「反自然的」（DS 5）なものとみなされる。社会とは際限のないものであり、「すべての人」が同じ秩序を共有しなければならない。もしそうだとするならば、あらゆる社会は自らの秩序を絶対視することによって「人類」と自称しうるのではないか。

もちろん、ベルクソンはそのように考えない。諸個人が責務で結ばれる社会のありかた、ベルクソンが「閉じた社会」と呼ぶものは、決して「人類」ではありえない。それにもかかわらず、彼は「人類」がすでに実現してしまったかのような態度を有用なものだとみなす（DS 25）。このことについては結論で触れる。

---

3 「自然のこの必然性を模倣する社会の必然性」（DS 7）。

次節では、「閉じた社会」論を検討し、「閉じた社会」が「人類」たりえない理由を確認しよう。

第２節　責務の本性

有機体の比喩には二つの含意があった。第一に、個々の部分が緊密に連携し合うことによって全体を構成すること、第二に全体の構造が必然的なものとして現れ、部分に力を与えることである。これらは別個の事態を示しているのではない。「責務の全体」は、避けがたい仕方で諸個人に行動への圧力を加えるという、まさにそのことによって諸個人を連携させる「不可視の紐帯」となる。また、諸個人の連携が緊密になればなるほど、責務は必然的なものと映る。責務とは、「全体の形式を維持するために社会の諸要素が相互に及ぼす圧力」（DS 53）に他ならない。

ベルクソンの社会論は、事実上責務論だと考えてよい。彼が一貫して追求するのは責務の「根本的構造」（DS 84）である[4]。「なぜ私たちは強いられるのかを知ること」（DS 86）が常に問題となる。

この問題に取り組む際、ベルクソンは個人から出発することをしない。個人とは「知性、自発性の能力、独立、自由」（DS 123-4）を与えられたものであり、第一に自分のことを考えてふるまう。こうした側面に着目する限り、個人と責務は相容れないように見える。

> 知性を与えられ、反省に目覚めると、それ〔個人〕は自分自身へと向きを変え、快適に生きることしか考えなくなるだろう。…知性はまず利己主義を勧めるというのが真実である。（DS 92）

4　Soulez (1989), p.267 も指摘するように、『二源泉』は道徳と宗教について、というよりはそれらの源泉について論じた著作である。ベルクソンが責務の構造にこだわるのは、これを解明し、なぜ人が従うのかを明らかにしないかぎり、道徳というものが生じる場をおさえることができないと考えたためであろう。

しかし、知性が「まず」利己主義を勧めるにしても、それを相対化することができるのもまた知性のみである。「賢明な利己主義」（DS 94）というものがあり、個人は自らを利するために他者あるいは社会一般の利害に配慮することができる。また、強制力を持った「善の観念」（DS 88）のようなものを想定して責務の内実を示すこともできる。理性（知性）[5]とは「私たちの活動に対して特定の目的を示すような」（DS 90）ものである。道徳が追求すべき目的として示されるとき、理性はその手段を「格率の体系」（DS 92）、それも「実に一貫した体系」（DS 91）として構築する。自分は何をすべきか人が知るのは、「理性が語りかける」（DS 86）ときのみである。こうして、「理性だけが命令を下すものとして現れるに違いない」（DS 81）。

しかし、理性に基づく格率は「一つの目的を知的に追求するための勧告」（DS 93）であるにすぎない。そして、いかなる目的も拒絶されうるものである以上「理性によって提案されるだけでは責務として課されることはないだろう。」（DS 90）したがって、格率が強制力を持つように見えるのは、「異なる次元に属する諸力」（DS 91）―責務の圧力―を知らぬ間に密輸入しているからだ。

それだけではない。目的の追求そのものが、行動へ向かわせる圧力の存在するところではじめて可能になる（DS 92）。したがって、「責務はそのすべての力をもって先に存在していた」（DS 95）のでなければならない。理性にできるのは、責務を「維持する」（DS 95）こと、「正当化する」（DS 96）ことのみである。しかし、一貫した整合的な道徳体系を提示することによって、理性は責務の強制力をも導出したと評価されてしまう。ベルクソンが主知主義的な道徳論に見出すのは、以上のような倒錯である。

5　ベルクソンは知性 intelligence と理性 raison をあまり区別せずに用いているように見える。ここでは交換可能なものと理解されたい。

「責務の原理を理性のうちに見出す」（DS 18）ことは、「すべての理論的道徳に共通する錯覚」（DS 93）でしかない。

ベルクソンが個人から出発することをしない理由は明らかである。個人は理性（知性）によって特徴づけられるものであり、理性からは責務を導出することができず、責務の全体から成る社会のあり方を説明できない。こうして、問いは出発点に戻る。責務の強制力は何に由来するのか。ベルクソンが利己主義のうちにさえ社会性を見て取っていたことに注目しよう。

> 実際、社会で生きる人間にとって利己主義は利己愛や褒め称えられたいという欲求などを含む。その結果、純粋に個人的な利害はほとんど定義不可能になった。個人的利害にはそれほどまで一般的な利害が入り込んでおり、両者を引き離すことは困難である。（DS 91）

責務はこのように社会と個人が分離しがたい次元、さらには「個人的なものと社会的なものとが相互に区別されない状態」（DS 34）にその起源をもつ。具体的に考えてみよう。私たちは家族をもち、職業に就いている。そして、親であること、職業人であることに対して期待されるふるまいを、ほとんど意識しないまま実行している。「十分に具体的になると、それ〔責務〕は、社会的地位によって私たちに付与される役割を果たすという、あまりに慣れ親しんでいるため私たちには自然なものと思われる傾向と一致する。」（DS 12）そして、個人の行動は、その大半が社会のうちで占める地位によって規定される。こうして、「社会こそが、個人に対して日常的生存 existence quotidienne の行動計画を与える。」（DS 12）日常生活が円滑に進行しているとき、人は強いられているということに気づかない。責務は「潜在的な」（DS 24）ものである。

しかし、責務そのものが何に由来するのかという問題はいまだに残っている。これを以下のように問い直したい。有機体の諸細胞と同じように、社会の中で諸個人が「相互に従属」し、それが責務になるのであれば、責

務は従属することと従属させることの両方によって成り立つはずだ。しかし、ベルクソンによれば、私たちが身につけるのは「ほとんどが従属する習慣」（DS 2）であるという。だとすれば、「従属させる」ことは何に由来するのだろうか。『二源泉』のうちに決定的な記述は見当たらない。さしあたり、以下の箇所を手がかりに考えてみよう。

> 諸規則が不条理なものであっても、すべての人が従えば社会の更なる凝集を確実にするのだから、それら〔曖昧な観念連合、迷信、自動症によって説明される禁止や命令〕は無益なものではない。（DS 18）

> ここ〔より未発達な社会〕では、社会的連帯が諸々の法律に、ましてや諸々の原理に凝縮されることなどなく、慣習を共同で受容することに基づいて流布するのだから、日常的な物事はすべて必然的に責務の性格を帯びる。（DS 128）

内容に関わりなく、すべての人が同じ慣習を受け入れ、同じ命令や禁止に従うということ自体が責務をなす。行為への圧力を形成するのは、すべての人が同様にふるまっているという事実そのものであろう。このことが意味するのは次のような事態ではないだろうか。私たちは、社会に要求された通りのふるまいをすることによって新たに要求を作り出している。従うことと従わせる力が別個に存在するのではない。従属する習慣を形成するというまさにそのことが従属させる圧力となる。諸個人が「相互に従属」するとは、このようなことを指すと考えられる。

前節と本節で論じたような社会―諸個人が責務によって結ばれる社会―をベルクソンは「閉じた社会」と呼ぶ。ここで「閉じた」という語には二つの含意があると考えられる。第一に、個人と社会との関係である。上で見たように、個人は社会の要求に従うことによってはじめて個人としてふるまうことができる。一方、諸個人は要求通りふるまうことによって、

知らない間に自らも要求する側に立ってもいる。個人的であることと社会的であることは円環をなしており、ここから抜け出すことはできない。これが第一の含意である。

> 魂は個人的であると同時に社会的でもあり、一つの円の中を旋回している。魂は閉じている。（DS 34、強調は引用者）

第二に（これは第一の点からの帰結であるが）、このような社会は慣習を共にする者たちのみによって形成される。慣習を共有しない者、できない者は受け入れられない。したがって、たとえ「法外な発展と無際限な複雑さ」（DS 54）を示していても、社会は「本質的に絶えず一定数の個人を包摂し、他の諸個人を排除する。」（DS 25）それどころか、社会の連帯が緊密であるためには、他の社会に対する「潜在的な敵意」（DS 55）さえ求められる。こうした排他性もまた（あるいはこちらの方がよりすぐれて）「閉じた」という語の含意である。

このような「閉じた社会」は「人類」ではありえない。量や規模の問題ではなく―閉じた社会は「巨大なものでありえる」（DS 25）―質的に異なっているのである[6]。しかし、このことは前節の結論と逆の事態をもたらさないだろうか。前節では、責務が必然的であるがゆえに普遍性を主張しうるということを指摘した。しかし、ベルクソンは責務によって結ばれた「閉じた社会」は、普遍的な「人類」には到達することはできないと何度も繰り返している。この問題については結論で改めて取り上げることにして、次節では「開かれた社会」について検討してみよう。

---

6 「…私たちが住んでいる社会と人類一般との間には、閉じたものと開かれたものとの間にあるのと同じ対比が存在する。二つの対象の差異は本性的なものであって、単に程度の差異があるのではない。」（DS 28）

第３節　「人類」あるいは「開かれた社会」

前節までで見たような、責務に支えられる社会のありかたは、「人間の起源的で根本的な道徳の構造」（DS 54）に基づいている。この構造は、種としての人間に与えられた条件であり、根本的に変容させることはできない。その意味で「種を構成するあらゆる作用と同様」（DS 50）、このように人間を作り上げた作用も「停止」（DS 50）である。ベルクソンが、こうした停止を打破する「偉大な道徳的人格」（DS 30）を想定したことはよく知られている。彼らの何が「偉大」なのか。

> 今日、私たちがこれらの善の偉人たちを思考によって復活させるとき、彼らが語るのを聴くとき、彼らの行為を目にするとき、私たちは彼らが自らの熱気を私たちに伝え、自らの運動へと私たちを引き込むのを感じる。これはもはや多少なりとも緩和された強制ではなく、多少なりとも抗しがたい魅力である。（DS 98）

これらの人物は、具体的に残した業績よりも行動へ向かう「熱気」あるいは「前進への熱狂」（DS 49）によって特徴づけられる。彼らは「偉大な行動人」（DS 102）であり、「意志」における「天才」（DS 56）である。そして、彼らがそのようなありかたで現れること自体が「呼びかけ」（DS 30）となり、「抗しがたい魅力」によって人を引き付ける。「呼びかけ」に応じるということは、彼らを「模倣」（DS 30）して「精神的結合 union spirituelle」（DS 99）を得えようとすることに等しい。もっとも、この場合、模倣とは模範となる人物と同じ行動をとることではなく、何をするにせよ、その人物の「熱気」を引き継ぐことである。責務によって結ばれた関係が緊密さを前提としており、したがって排他的であるのに対して、「一つの模範を共通に模倣すること」（DS 30）のうちには排除の契機が存在しない。「開かれた社会」とは、このような模範的人物に人々が惹かれ、強制とは

異なる―しかし抗しがたい―仕方で行動に導かれるあり方のことを指す。こうして、「開かれた社会」は特定の集団というよりは、徐々に広がっていく運動として示される。

もちろん、すべての人が共通の呼びかけに応じ、共通の模範的人物に従うことなどありえないのだから、「人類」という一つの「開かれた社会」が存在することはない[7]。しかし、模範となる人物が「偉大な行動人」であるのは、困難など存在しないかのように「所与の社会では実際には不可能であることを可能だと想定する」（DS 78）からである。私はこれを「実際には不可能な人類というものが、あたかも実現してしまっているかのような態度をとること」と解する。この意味で、こうした人物は「人類全体を包摂する」（DS 34）のである。以下、注意すべき点を三つ挙げておこう。

第一に、「開かれた社会」は「閉じた社会」と数的に異なるものではない。つまり、人々は既存の（自らが元々身を置いていた）「閉じた社会」を離脱して「開かれた社会」に加わるのではない。たしかに、以下の引用箇所にある「人間の国々」「神の国」という語を見ると、「閉じた社会」と「開かれた社会」が概念的にのみならず、現実的にも区別されるように理解しても不思議ではない。

> …歴史に名を刻んだ偉大な道徳的人物たちは、何世紀もの時を超えて、また私たち人間の国々を超えて手を取り合っている。彼らは一緒に神の国を形作っており、そこに入るよう私たちを誘っている。…私たちは自らが属している社会から、理想的な社会へと思考によって移行する。（DS 67）

しかし、この箇所にも先に引用した箇所にも「思考によって」とある

7 「人類は、すべての人間を包摂する唯一の社会が可能であると思われるような変化をしなかっただろう。実際、そのような社会はいまだ存在しないし、おそらく一度たりとも存在することはないだろう。」（DS 97）

のを見逃してはならない。多くの人は、偉大な道徳的人格と直接会うわけではない。そうした人物の言動や業績は既存の社会の中で伝えられる。したがって、模倣するためには伝聞をもとに人々が模範的人物の人格を想像し、自分自身の思考の内部で生み出すのであるが、そうした営みもまた既存の社会の中で行われる。「開かれた社会」とは「閉じた社会」と並び立つものではなく、「閉じた社会」の内部から生じ、これを変容させる運動である。

第二に、「人類」は目指されるべきものではない。これは、「開かれた社会」が運動であることからおのずと帰結する。もし「人類」があらかじめ定められた到達目標であったならば、そこに達することが一つの停止になってしまうからである。逆説的に見えるが「私たちは一気にそれ〔人類〕よりも遠くに身を置いているのでなければならないし、人類を目的とするのではなく、人類を超えることによって人類に到達しているのでなければならない。」（DS 28-9）

第三に、「人類」は記憶にかかわる。人間が本性的に「閉じた社会」を形成するものであり、愛情や「社会的連帯」（DS 55）が同じ集団内でしか生じないのだとしたら、私たちはなぜ「普遍的正義」（DS 76）や「人類的友愛」（DS 55）について知っており、これらを受け入れることができるのだろうか。それは、偉大な道徳的人格のもたらした運動が、「閉じた社会」をある程度変容させてしまっているからである。

> …神秘主義的な魂〔ここでは偉大な道徳的人格と同一視して差し支えない〕こそが、文明化された社会を自らの運動へと牽引したのであり、今なお牽引しているのである。これらの魂が何であり、何をしたのかという思い出 sovenir は、人類の記憶 mémoire de l’humanité のうちに沈殿している。私たちの一人ひとりは、この思い出を甦らせる〔再活性化する〕revivifier ことができる。…たとえ私たちが偉大な人物の誰かを想起しないとしても、そうした人物を想起できるであろうというこ

> とを知っている。…たとえ私たちがこれらの人物に無関心であっても、文明化した人類が今日受容している道徳性の一般的定式が残っている。この定式は二つのものを含んでいる。非人称的な社会的要求によって課される命令の体系と、人類のうちで最良の部分を代表する諸人格によって私たち一人ひとりの意識に投げかけられる呼びかけの総体とである。（DS 85、強調はベルクソン）

「偉大な道徳的人格」によって社会はある程度変わってしまっており、彼らがもたらした成果は「沈殿」している。「閉じた社会」の排他性に抗するためにはこの「思い出をよみがえらせる」必要があるのだが、それは偉人の業績を「人類愛」のような概念にまとめ上げ、新たな義務にすることではない。そうした定式化はむしろ行動への意欲を失わせることになりかねない。

> 青少年を教育する者は、「利他主義」を推し勧めても利己主義を克服できないことをよく知っている。高邁な魂を持ち、献身への熱意に満ちている人が、自分は「人間という類のために pour le genre humain」尽すのだと考えると、突然気持ちが冷めてしまうということすらありうる。（DS 32）

「思い出をよみがえらせる」ことは、特定の内容を想起することではない。偉大な道徳的人格が伝えた「熱気」を自らの内で再び活性化することである。それは各人が自分自身ですることであり、「努力を要求したし、常に努力を要求している。」（DS 35）

以上の議論をまとめてみよう。ベルクソンは、人間が社会的に生きる際の条件と可能性を示したのである。人間は一つの社会で、その社会の慣習に従って生きることを余儀なくされている。あらゆる社会は自己保存を目指しており、他の社会とは潜在的に敵対する。これは人間のおかれた生

物学的条件である。その一方で正義や友愛などといった普遍的価値が広く共有されてもいる。これは、特権的な素質を持った人物たちが、実際には実現しえない「人類」をあたかも存在しているかのようにふるまうという「創造の努力」（DS 78）によって、そうした価値を実効的なものにした後の社会を私たちが生きているからである。私たちの社会は、諸個人が責務のみによって結ばれていたものからはいくらか変わってしまっている。これを歴史的条件と呼ぶことができるだろう。ベルクソンは、強固な生物学的条件を歴史的条件によって相対化している。

しかし、道徳的偉人の働きは「例外的」（DS 99）なものでしかなく、また彼らの示した熱気はすでに失われている。普遍的価値を実効的なもの―単なる概念ではなく実際に人を動かすもの―にするためには、彼らの熱気を自分たちのうちでよみがえらせるのでなければならない。それには「絶えず新たになされる努力」（DS 78）が必要とされるが、その努力をすることは常に可能である。

結論とまとめ

既に見たように、ベルクソンは特定の社会―家族であれ国であれ―と「人類」との間に程度の差異ではなく、本性の差異を認めた。それは、彼の考える「人類」が人間の集合であるというよりは運動そのものだからである。したがって、一つの社会をいくら拡大しても「人類」に至ることはない。しかし、多くの人がそのように考えないことをベルクソンは認める。

> 市民としての徳の習得は家庭でなされるということ、それと同様に、祖国を慈しむことが人類を愛すことの準備になるということが好んで言われる。このように、私たちの共感は連続的な進展によって拡大し、同じものであり続けながら増大して、ついには人類全体を包含するだろう。（DS 27）

多くの人が、自分たちの社会の延長上に「人類」があると考えるのは、第 1 節でも述べたように、社会を支える責務が必然的なものとして現れるからだろう。ここでは社会秩序は（たとえ相対的に変化していたとしても）、そのつど自らのありかたを「決定的な形態であると主張する。」（DS 56）ベルクソンは自らの考えとは異なるこのような事態を、実践的に有益だとみなしている。

> 社会は言う。社会によって定められた義務は、原理的にはまさしく人類に対する義務であるが、しかし、不幸にも避けることのできない例外的な状況では、その義務を果たすことは中断される。もし社会がこのように説かないのであれば、社会はもう一つの別の道徳、直接社会に由来するのではないが、それに配慮することがあらゆる意味で社会の利益になる道徳が進展する道をふさいでしまうことになるだろう。（DS 26、強調は引用者）

社会は、自ら定めた義務を普遍的なものであると主張する。もちろん実際にはそうならないのであるが、その状況を不幸な「例外」であると言い繕う。こうした事態は、「もう一つの別の道徳」、つまり真に「人類に対する義務」であるものの進展を目論むベルクソンの立場からすると好都合である。既存の社会の側が、自分でも正体のよくわかっていないものを存在すると勝手に信じ込んでくれるのだから。

さらに注目すべきは、この義務（人類に対する義務）が、「あらゆる意味で社会の利益になる」と述べられていることである。「閉じた社会」の排他的な連帯が結局のところ戦争に行きつくのであれば、普遍的な「人類に対する義務」に「配慮する」ことには「閉じた社会」にとってさえ十分な意味と価値がある。こうして、「閉じた社会」と「人類」（あるいは「開かれた社会」）は、互いを利用することが可能だという結論に至る。本稿

の冒頭で引用した箇所に立ち戻ってみよう。前後を含めると以下の通りである。

> 「人々は、人類社会 société humaine」が現在もう実現していると断言することを控えているが、実現したと信じさせておくよう望んでいるだろう。そして、そう信じさせておくのがよいのである。というのも、私たちは異論の余地なく人間としての人間に対する義務を負っているのであり（少し後で見るように、それらの義務はまったく異なる起源を有するのだが）、これらの義務を同胞に対する義務から根本的に区別すると、これらの義務を弱めてしまうかもしれないからである。（DS 25-6、強調は引用者）

（実際は違うけれど）「そう信じさせておくのがよい」という表現からは、傲慢さやシニカルさ以上に必死さが伝わってこないだろうか。「人類」があたかも存在するとみなすことによって正義や友愛などの普遍的価値を実効化し、戦争のリスクを避けることは、第一次世界大戦を経験したベルクソンにとってなりふり構わずなさねばならない喫緊の課題だったのである。

参考文献

Soulez, Philippe.1989. *Bergson politique*, Paris, PUF.

Warterlot,Ghislain (ed.). 2008. *Bergson et la religion. Nouvelle perspectives sur les Deux Sources*, Paris, PUF.

Worms, Frédéric. 2008. Le clos et l'ouvert dans *Les Deux Sources de la morale et de la religion*: une distinction qui change tout, in Warterlot 2008.

（にしやま・てるお　慶應義塾大学文学部非常勤講師）

La position de l’humanité chez Bergson

Teruo NISHIYAMA

Dans *Les deux sources de la morale et de la religion*, Bergson a affirmé que nous avions des devoirs envers l’homme en tant qu’homme, en d’autres termes, des devoirs envers l’humanité. Mais en même temps, il a nié la possibilité d’une société humaine unique qui comprend tous les hommes. Nous vivons dans une société dans laquelle touts les individus sont liés les uns aux autres par des obligations. Ce type de société inclut toujours un certain nombre d’individus et exclut les autres. Elle est close, quelque soit sa grandeur. Les sociétés closes sont virtuellement ennemis les uns des autres. Si notre condition sociale est ainsi, qu'est-ce qu’il veut faire quand il mentionne l’humanité? Le but de cet article est de préciser la position de l’humanité dans la philosophie morale de Bergson. Nous verrons qu’il a concentré ses efforts pour rendre efficace les valeurs générales comme la justice et la fraternité.